

◆【海員随想】二つの救命胴衣⑦ 石橋 正

「自力座礁する。全員を上を上げてくれ」

激しく揺れる船内を機関室へ向かった。機関長もまた救命胴衣を少年船員に託していた。  
互いの覚悟を感じた

大きな波が1つ過ぎたとき、いつも乗組員のまとめ役になってくれていて、このときも救命胴衣を2つ着けた少年船員の肩を抱いて座っていたボースンが静かに話しかけてきた。

「船長、この船の最後に、皆でお茶を飲みませんか……」やや間をおいて航海士が

「そうだな」と応じ「船長、もう1度波に立てて海岸から離れてくれませんか」といった。

私はもう何を考えるのも苦痛なほど疲れ切っていて、情ない話だが、誰かが何か言ってくれるのを待っているような気持ちであった。

私は波の合間を見定めて一気に反転、再び船首を沖の方に向けた。そして舵を操舵手にまかせ、揺れる船内を船長室にお茶の道具を取りに行った。司厨長がヤカンを取りに行き、別な一人が電熱器を探しに行った。

若いときの私は、終戦直前の荒々しい軍事訓練の体験が抜けきれず、考え方も行動も直情径行、きわめて攻撃的な男であった。航海を終えて東京に入港、役所に報告に行き研究室に入ってゆくと、何か周囲に殺伐とした空気が流れるとうわさされていた。そこの研究助手の一人に、ちょうど私と同年輩で茶道裏千家の師範代の肩書を持つ女性がいて、私の固い姿勢の内面に脆弱な虚構を見たのか、その人は私にお茶を習うことを盛んに勧めてくれた。

茶道などは堅苦しい面倒なものと思って気も進まなかったが「形にとらわれなくてもいい」という彼女の熱心な勧めと、すでに習い始めていた親友から「おい、お菓子も食えるぞ」という誘いもあり、そーっと茶室の隅に座ってみることにしたのである。しかし静かな茶室で、海上生活とは全く正反対の雰囲気浸っているうちに少しずつ不思議な魅力を感じ、ついついお茶の道具も買い揃えるようになったのである。

そして航海に出るときには抹茶や金平糖なども買っていき、寄港地で暇なときなど、船尾デッキの天幕の下で、乱暴なやり方でお茶を点てて乗組員にも飲ませ、得意になってお茶の講釈をしていた。それが習性となり、乗組員の中には甘いものが欲しくなると「船長、お茶を点てませんか」と、妙に優しい声で私に誘いをかけてくる者もいた。

「海員だより」